



アンドロイドの花園

星に願いをシリーズ

著者 モカ / 絵 Nanaha

たで たでて露 し の叶。 ういてて りに ないつにた君た た 空のき星 思 僕 に幸をも
 る畑 しんえ朝 ま でをす よ辛れし ま体 かな扱てつ、っ しろ 夜械瞬れ て う りの理つ
 えう ませかに い 畑いで の、優た くの 動しか捨願いあ ま の機が流 っ そ 眠僕整い
 叶ど いまむ実 て 。願の かはにき ずア が配しいと願が い こド星？ だ 。 て、のる
 をぶ 言れをの め すのた る体性を うフ 体心て使。の密 て もいとた ド」た 見が憶い
 いが とさ期う 眺 ま人っ めの水障 にイ なるしはい僕秘 め。かロンシ イ？」し 眺た誰ドラ事 口いよま 夢れ記が
 願妹 ア許穫ど を じ主だ かア防支 面テ 様いと人たはい をしのンキい ドだのみ 日を。脳て
 の兄 フは収ぶ 実 感ほせ 確フ、に 地。 うが物主りれ無 空で他ア然願 ンんい笑 明るにい
 人の イと、。 の をド幸 をイ性作 はす 思僕をを守そは 夜間い、突お アなな微 間は時な女。か」はんわく 真君いフ
 主ド テこはす う ぎイは セテ久動 アま にに人妹をいに は時な女。か」はんわく 間は時な女。か」はんわく 間は時な女。か」はんわく
 、イ。をむでま ど ら口人 幸。耐ず フリ いめ二兄ア願ド 人はいら少す何よ私な叶ほ 二な知るまはい、はとつ。 を笑てイ
 は口す前休畑い ぶ 安ドニ 。たらか イ寄 たたはのフのイ 人にいら少す何よ私な叶ほ 二な知るまはい、はとつ。 を笑てイ
 ドドで名も。て と のンも すしく動 テけ みの人式イ君口 に少のめれド無ね願うらい と微しテ
 インのの目たっ 」リ」時アて ままいく 。駆 前そ主旧てるド 夜数私眺らエてのの言ズな 」ここに止、
 ロアた妹のしが イトね一、っ みたい械手 るに 、夫のり。イン なの。をじ、んうアにタれ アるう停朝
 ドにっ、風まさ レッドだててあ 笑て機上 すア 、文妹かたがア イ一ね空感が言フ人いら」フあそりい
 ン町だもいら キウイめっで」微い密が がフ 私大兄かし僕の 唯一夜に星いとイはいはいドイがせよな
 アるいエ日てぶ 、はし止だ々よは抱精節 がフ 音イ ね、にがでは他 てるレとうれ願こテ願アうエテ日幸にら
 はあ願はのい山。ドアキを。日セアをは関 れテ。んアと金んに、 が得キリよ流はい、フもみみ明、事わ
 でのの前雨働沢たエフ、手たい幸フイ体の。ン壊なたへフこおせ君は 星をがトいてにしゃ密イど休休は中る変
 国国人名。でがしてイ当もし辛、イ思の体たヤがにし近い、まうに 星をがトいてにしゃ密イど休休は中る変
 るる主のす畑さでみテ本ドでに私テなドきしシ物そま最テしはいそ妹 星をがトいてにしゃ密イど休休は中る変
 ああが兄まうふう」と「エせな」と雜イツまがとはじ「悲にて「兄 星をがトいてにしゃ密イど休休は中る変

ガシャン

と言う物の壊れような音でエドは目を覚ましたのです。目を覚ますとティファの姿が見えませんでした。嫌な予感が頭によぎります。そんな事は、あり得ないあってはならないのだとエドは自分に言い聞かせ恐る恐る音がした戸の外を覗くとクワをかついだ主人が立っていました。その下には無惨にも壊れ物になってしまったティファが転がっていました。エドは、膝から地面に崩れ落ちると大事そうにティファの体を抱き寄せます。これ以上壊さないように傷つけないようにと。それを見ていた主人は怪訝そうに

「何がそんなに悲しい物の癖に人間にでもなったつもりか！？ガラクタがゴミになっただけだろう」

と心ない冷たい言葉を言います。

「貴方って人は、人には心が無いのですか！？アンドロイドにはある。ティファは貴方の幸せをあんなにも願っていたのに何故なんです」

「偉そうに、まあいい教えてやるよ金さ金だよ。昨日知人に聞いたのさ旧式のアンドロイドの核には高価な宝石が使われているそうじゃないか、使えないアンドロイドより宝石の方が価値がある。人の心はアンドロイドよりもきょうでね金で心が買えるのさ」

「やはり、貴方はイブの主人に相応しくなかった。でも、イブは貴方を主人に選んでしまった。」

「アンドロイドの癖に人間を欠陥品みたいに言うな俺は主人だぞ！！」

エドは、立ち上がり肩をガクガクと震わせ怒りを堪えられなかった。怒りとは対象に顔には笑みが浮かんでいる。

「誰が主人だって、僕の主人が人間なわけないだろう醜くそして簡単に壊れてしまう欠陥品の人に僕が使える分けがない笑える冗談だよ」

「どういうことだ嘘を言うなじゃ無い、誰がお前の主人だと言うんだ」

「僕の主人はイブだ、イブは昔僕のためだけに創られたアンドロイドだった...」

そうもう何十年も昔、発明家は一体の精巧なアンドロイドの少年を創った。名をアダムと言った。アンドロイドの名前は主人が付ける。アダムの最初の主人は、子供が出来なかった老夫婦二人はアダムを自分の子供の様に愛した、でもアダムより先に居なくなった。次の主人は弟が欲しいと駄々をこねた女の子、彼女も成長するとアダムを必要としなくなった。アンドロイドは孤独を知った。アダムは博士に願った。年をとることもなく、死んでしまうことのない主人を...

そして、創られたのが一体の少女のアンドロイド名前をイブと言った。彼女はアダムの主人になるためだけに創られたアンドロイド。イブはアダムに新しい名前を付けたエドと、アダムはエドになり永遠の主人を手に入れた。でも、イブもアンドロイド彼女も主人を選んだ。彼女の主人は彼女にティファと名づけた。

「そう、それが貴方だ！そしてアダムは僕」

「ふざけるなアンドロイドが主人になれる訳がない！」

と主人が叫んだ時だった首もとが締め付けられる。

「うあ...」

と首を締め上げられた主人が嗚咽をもらす。エドは苦しむ主人を見上げて

「だから、僕は貴方を許せない主人の願いを叶えるために」
エドの手により一層力が入る人の骨が軋む嫌な音がする。

「エ...ド...、やめて...」

と確かにティファの声が聞こえて来た。エドは主人を放り出しティファのもとへ行き体を抱きよせる。

「ティファよかった。まだ、動けるんだね」

「エド聞いて、私は今とても幸せよ。だって、主人の願いを叶える事が出来た。あの人を責めないでこれは私が望んだこと私の願い」

カタカタとティファの体が嫌な音を立てる。

「君はそんな姿になっても主人の事を…。でも、僕はあの人を許すことは出来ないよ」

「エド、私はあの夜星に願ったの主人の願いが叶いますようにと。星は私に囁いた貴方の願い叶えましょ、でも対価と引換に。主人には、どうしてもお金が必要だった体の弱い娘の為に私の力ではどうする事も出来ない、そうこれは私が唯一払うことの出来る対価これでいいのよエド。だって私はアンドロイド主人の幸せが私の幸せ」

アンドロイドは、主人の願いを叶える為だけに存在している、アンドロイドを必要としてくれる人がいることこそ彼らの幸せだった。

「君の願いは、僕の願いだ。絶対叶えてみせるだって君は僕の主人だから、今はゆっくりオヤスミ」

「ありがとうエド私のアンドロイド、そしてご免なさい貴方の永遠の主人になれなくて」

ティファは瞳を閉じ永遠の眠りにつきました。エドは、ティファを抱き抱え立ち上がると倉庫の中に入り二階に続く階段を登って行きます。

「何処に行く！そいつは俺のものだぞ！？」

エド、は振り返ることはせずに

「主人の願いを叶えに…」

二階には大きな窓がありそこから見える景色は、朝日がそそぎ空は青くとても静かな朝でした。エドがもうこの青いどこまでもつづく空を見上げることはありません。空を見上げるのは自由を夢見るカゴの小鳥だけ。

「ティファ、僕にも願い事が出来たよ。僕は君と永遠に一緒にいる事が願いだ。だけど僕は、願ったりしない叶えてみせる」

と言うとエドは、窓に足を掛けたと同時に窓の外に飛び出したのです。

「君がどんな姿になろうとも、君は永遠に僕の主人何処にいてもきっと見つけてみせる」

二人の体は、地面に叩きつけられバラバラになりエドは、停止した。

君の願い叶えたよ、次は僕のばんだ…。

二人が横たわる側には、星のカケラが星は瞬きし貴方の願い叶えましょ対価と引き換えに…と静に囁いた。エドの話はまだ始まったばかり、これはある夢を見るアンドロイドのお話。

あとかき。

アンドロイドの夢を読んで頂きありがとうございます。

前々から考えていたお話を、今回形にすることができました。

まだまだですがもっと奥行きがあるストーリーが書けるよう頑張りたいと思っています。

この話は、星に願いをシリーズです。

願いや夢をただ叶えるだけでなく、少しスパイスを加え対価を支払わなければならないことで現実感を出してみました。

現実でも夢を叶えるためには苦勞がありますものね。少し可愛そうですがエドには努力をさせていただこうと思います。

まだ考えているストーリーがあるので少しずつupしていけたらと思います。

また、お付き合いいただけると嬉しいです。

ご意見ご感想お待ちしております。

モカ

アンドロイドの夢。

<http://p.booklog.jp/book/13942>

著者：モカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/retoropot/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/13942>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/13942>